

〔特別講演要旨〕

『Guided Tissue Regeneration (GTR) 法について』

鹿児島大学歯学部 歯科保存学第二講座

末 田 武教授

と き：平成5年9月4日

歯周炎により破壊をきたした組織、特に、結合組織の再生と、再生組織による歯根膜を失った根面への新しい付着（新付着）を得るために、様々な方法がとられてきた。しかし、従来より行われているこれまでの歯周治療は、歯肉の炎症を除去し、疾患の再発を防止することを主たる目的としており、失われた組織の再生はほとんど不可能と考えられてきた。特に、機能を果たさなくなつたセメント質表面に細菌が付着した場合には、歯肉剥離搔爬手術（Frap Operation）を行っても機能を果たすセメント質の再生は認められない。

根面に付着する細胞には、歯肉上皮細胞、歯肉結合組織細胞、歯槽骨細胞、歯根膜細胞があり、歯根膜細胞が根面に付着した場合にセメント質の再生が起こり得るという仮説が1976年Melcherにより発表された。その後、セメント質再生に関する一連の研究が行われ、セメント質の再生が歯根膜細胞によることが証明された。

セメント質の再生をもたらすためには、セメント質の再生を期待する根面に歯肉上皮細胞、歯肉結合組織細胞の侵入を防止し、歯根膜細胞が増殖するようにしなくてはならない。このような中で、Nyman, Lindheらによって歯根膜と歯肉との間に“膜”を用い、新生セメント質形成および根面への結合組織性付着を獲得する方法、すなわちGTR法（Guided Tissue

Regeneration）が考案された。

歯周治療において考案されたGTR法は、新付着の獲得を目的とするが、他の分野、例えばインプラント分野では骨組織を、口腔外科、整形外科の分野でも脚光を浴びて、それぞれの目的に沿った組織を誘導する新しい画期的な治療方法である。

現在臨床応用のために必要とされる研究は、多くの症例の中からどのような場合が最適応か、また不都合な場合はどのような症例か、未だ混乱した情報を整理し、補足することが必要となっている。また、新付着獲得には、定義から考えると骨添加・再生は必要としないが、骨の再生を伴わない新付着にどのような不都合があるかなど検討を加えていかなければならぬ。

歯周治療におけるGTR法は、清潔な歯根表面に歯根膜由来細胞を誘導するのであるから、術者は歯周治療の基本を理解し実践していかなければならない。スケーリング、ルートプレーニング技術はもちろん、通常の歯周外科処置の習熟、さらにメインテナンスの重要性の理解と実践が必須である。すなわちGTR法は患者による適切なブラークコントロールの基盤の上に成り立っているのである。

（文責：歯科保存学第一講座 小鷺 悠典）